獣医学用語の標準化

伊藤 全^{*1}

科学技術分野における専門の分化に伴い、従来は無関係と思われていた分野同士の総合化が問題にされるようになってから、既に久しい。

獣医学領域も例外ではなく、知識の細分化が進む一方では、細分化した分野の間及び他の学術領域との間での知識の交流が重要性を増してきている。

異なる分野の間で知識の交流を円滑に行うためには、それぞれの分野内で事物の表現に使われている方法の分野間格差を調整することが必要になる。

更に、表現された事物を定着・伝達するための方法・媒体の種類は最近とみにその数を増し、自分に都合のよいものを選ぶことができる時代になってきているが、ここ当分、私たちの仕事のなかでコトバの重要性が減じるとは考えられない。

コトバには話しコトバと書きコトバがあり、音声入力ともなると、またそのような面での話しコトバの検討が必要になるであろうが、ここでは、書きコトバを中心に話を進めたい。

専門用語

私たちが少なくとも責任をもたなければならないのは、獣医学領域で使用されるコトバ、かたくいえば獣医学専門用語の問題である。

しかし、獣医学の専門用語だから獣医学領域の関係者だけで決めればよいとはいかなくなっている事情は、つまり、専門用語の問題は、典型的な学際領域の問題といえるのである。

ここでやや冗長のきらいはあるが、ユネスコ情報管理用語集の「用語」関係の定義を引用しておこう。

この用語集は1976年に出版され、英独仏露西語が付されており、日本では1984年にその仮訳が出された。なお*印は、この用語集のなかで別に定義のあることを示す。

用語 term

概念*を表示するために用いる語*または句*

Standardization of veterinary terminology.

^{*1} ITO, Tamotsu: 東京農業大学農学部学術情報課程
東京都世田谷区桜丘 1-1-1 (郵便番号 156)

専門用語 jargon (common technical language)

特定知識*分野における共通言語*

専門用語 technical term

専門言語*の用語*

専門用語 technical language

自然言語*に基づきながら知識*の特定分野におけるコミュニケーション*を援助するために、多義性*を減らすように工夫された言語*

自然言語 natural language

進行発展をとげた言語*で、その使用に明確な規定はないが、現行の用法を反映している言語*

用語統制 terminological control

同義語*および準同義語*については相互参照*を対応させて指示し、同音異義語*や多義語*については限定記号*で識別するような統制*

terminology

(1) 用語学: ターミノロジー

概念*の形式および命名を扱う学問分野。特定の主題分野*にかかわるものであっても、すべての主題分野*にかかわるものであってもよい

(2) 専門用語集

意味*を説明または定義した専門用語* (technical term) を組織した集合

「専門用語」がふたつの西欧語に対応しているのは困るが、各領域の専門家が technical term と考えているものの多くは、領域外の人からみれば jargon であるらしい。文部省の学術用語集は、その英語名を Japanese scientific terms とし、昨年発足した「専門用語研究会」は terminology を用いている。しかし先日開かれたこの研究会の第1回シンポジウムの席上で、国語学の柴田武氏が学術用語集のコトバを jargon と規定していたことは興味深い。

このようなことから、用語問題を扱うには、この格差を認識することが、まず第一に必要であろうかと思われる。

用語の標準化

「統一」がきらわれ「標準化」を使うようになった

のにも、電算機の機能の急速な向上が貢献しているように思われる。JIS 第2水準を含む6,300以上の漢字が16-bit 機では容易に入出力できるようになり、当用漢字表が常用漢字表に変わって、漢字使用の自由度が増すなど、世の中の多様性はこのような面でも増加の一途をたどっている。

電算機はこの多様性に対応した機能をもつてであるが、その処理のためにはそれ相応の仕掛けが必要であり、その処理自体にもそれ相応の時間と費用がかかるわけで、学術的な表現・表記には、必要以上の多様性を避けるのが筋ではなかろうか。

獣医学に分類される文献の量は、全世界で年々数万件程度と思われるが、10年たてば数十万件に達するし、私たちの仕事には獣医学以外の領域の文献も必要となるので、年々数十万から百万件に及ぶ文献が蓄積されていく巨大なデータベースを検索しなければならなくなることもしばしばある。

蓄積された大量のデータのなかから必要なものが能率よく選び出せなければ、データと蓄積は無用の長物と化してしまう。

電算機の出現前から主として文献資料の整理を目的として使われてきている国際十進分類法 (UDC) や文献の入れ物である図書資料を主な対象とした日本十進分類法 (NDC) などの階層的な分類法では、文献等の整理対象に一定の標数を与えて、検索に役立てようとする。このふたつの分類法で「獣医学」とその上位概念は下記のように規定されている。

UDC 6 応用化学, 医学, 工学 (62), 農学 (63)
61 医学, 衛生, 薬学
619 獣医学
NDC 600 産業 (医学490, 技術, 工学500, 農業610)
640 畜産業
649 獣医学, 比較医学

この種の分類法の便利さは、国語の表記の違いがあっても、「獣医学」の概念が、この場合には3桁の数字だけで現すことができる点にある。しかし、この標数をつつけるため、また逆に標数からその意味する概念を捜し出すためには相関索引を使わなければならない、コトバを抜きにすることはできない。

前出の「用語統制」は、用語の標準化のひとつの方向であり、自然言語では多岐にわたりすぎる同義語や準同義語を整理し、検索効率を向上させるためのシソーラス (thesaurus) 作成の重要な過程である。

文献の索引を作るためのシソーラスは、Roget の

ものや「分題語彙表」のような従来のシソーラスとはその目的を異にしており、そこで使用すると決められた descriptor (記述子) だけで論文を書くことは不可能であるが、用語の標準化を考えると、関係シソーラスを無視することはできないはずである。

文部省の学術用語集をはじめとする従来の用語集の使いにくさの原因のひとつは、用語間の関係が全く又はほとんど示されていないことにある。

獣医学用語の特性

獣医学の範囲を定義せずにその用語について語ることは難しいが、その論議には深入りせずに、おおまかな特性を記してみる。

現在の日本の獣医学が、明治初年に導入された西欧獣医学を主な基盤としているため、その用語の大半は西欧語を翻訳したものである。

日本では、獣医学は農学の一科とされている場合が多い。しかし、UDC や NDC 等をみても獣医学が医学の一分野でもあることは疑いなく、獣医学用語には人の医学用語と共通のものが多く。

しかし、獣医技術を実際に使う畜産分野との密接な関係から、農学の要素を切り離してしまうわけにはいかない。獣医学の主対象は家畜であり、経済性の重みが人の医学のそれに比し極めて大きい。

農学の際立った特性である地域性は、獣医学ではやや薄らぐ。対象動物の種類は、人だけを対象とした狭義の医学よりも多いが、魚や動物園動物、野生動物を除くと、農作物の多様さには遠く及ばない。

獣医学用語の標準化の動き

上記のような要素が絡み合い、獣医学の用語集・辞書・事典の数は、世界的にもあまり多くない。私たちは少なくとも医学と畜産の2分野の用語集を手放すことができなかったが、この3月末に「獣医学大辞典」が発行されたことは、慶賀にたえない。

日本獣医学会は、文部省の学術用語集作成に際し「医学用語の大勢がきまるまでは」との態度で、積極的な作業は行わなかったと聞いている。学術用語集の農学編は、編集開始以来39年かかって1986年に発行されたが、そのなかには、獣医学用語が若干含まれているという状態にすぎない。

一方、医学関係では、文部省の学術用語集とは別に、日本医学会が中心になり、1975年に「医学用語辞典」を発行したが、これは主としてドイツ語を基盤にしたもので、使いやすいとはいえなかった。聞くところによると、その後の作業を集大成したデータベースができあがっているとのことである。

日本科学技術情報センター（JICST）の「科学技術用語シソーラス（1987年版）」は48,000余の語を含む汎用シソーラスであるが、その「家畜病」の項を参考までに挙げておこう。右側に文部省の学術用語集（農学編）の対応語を付す。

*は対応語なし。○は両者同じ。

家畜病（カチクビョウ）	*
NT 家畜ウイルス病	ウイルス病
・ アカバネ病	*
・ 家畜痘そう	痘そう
・ ジステンパー	犬ジステンパー
・ スクラピー	*
・ 伝染性気管支炎	鶏伝染性 気管支炎
・ 伝染性喉頭気管炎	鶏伝染性 こう頭気管炎
・ トリ白血病群	白血病
・ ・ Marek 病	*
・ ニューカッスル病	○
・ ブタコレラ	豚コレラ
・ ブタ伝染性胃腸炎	*
家畜栄養障害	栄養障害
・ グラステタニー	*
家畜寄生虫病	寄生虫病
・ イヌ糸状虫症	*
・ ブタ旋毛虫症	*
家畜原生虫病	*
家畜細菌病	細菌病
・ Johne 病	ヨーネ病
・ ブタ萎縮性鼻炎	い[萎]縮性鼻炎
・ ブタ赤痢	*
・ ブタ丹毒	豚丹毒
・ ブタ流行性肺炎	*
家畜真菌病	*
家畜繁殖障害	繁殖障害
蹄病	*
BT 病気	病気・疾病
RT 患畜	*
NT: narrower term	下位概念語
BT: broader term	上位概念語
RT: related term	関連語
・ : NT の NT	

JICST の JOIS ファイルに農学関係文献が入力され始めてからまだあまり時間がたっていないとはいえ、その検索に使用するコトバの現状には驚かれるかもしれない。

1970年以降、農水省委託事業として発行を始めた「日本農学文献記事索引」は当初年間1万件の日本文献を収録していたが、発行開始後9年を経た第18巻索引（1979）の約1,000にのぼる見出し語のうち、獣医学・医学に分類された語は下記15個にすぎない。

なお、右側に JICST シソーラスと文部省の学術用語集（農学編）の収録状況を付す。

○ 収録あり、* 収録なし、△ 収録されている対応語。順序は第18巻の文献数の多いものから。

	JICST	学術用語集
獣医学	○	○
麻酔	○	*
医学	○	*
下痢	○	○
中毒	○	○
乳房炎	△ 乳腺炎	○
白血病	○	○
貧血	○	○
ニューカッスル	○	○
日本脳炎	○	○
マレック病	△ Marek 病	*
化膿	○	*
グラステタニ	△ グラステタニー	*
口蹄疫	△ 口蹄病	○
結石	○	*

このファイルも第23巻（1981）以降、電算機検索が可能になったが、印刷体索引とほとんど変わらない descriptor を使用しているのは問題であろう。

これらのリストだけから JOIS ファイルや「日本農学文献記事索引」の検索能力を判断することは早計であるが、ひとつの側面から見るとこのようなことになってしまうのである。

文献検索と関係が薄いため不勉強で最近の事情にうといが、農水省の家畜共済関係にはその業務上の必要性から、病類別リストがあるはずであり、法令及び行政的に使用されている用語にも注意を払っていく必要がある。

外国・特に英語・米国での動きについては、私の知っているもののうち、主な出版物を以下に列挙するにとどめる。
Standard Nomenclature of Veterinary Diseases and Operations.

Epizootiology Section, National Cancer Institute, U.S. Department of Health, Education, and Welfare.

First ed. 1964, Rex. ed. 1966 (622p)
 Agricultural/Biological Vocabulary.
 U. S. Department of Agriculture. 1976
 この Veterinary medicine の部の日本語対訳は、
 家畜衛生研究報告 No. 60, 47-85 (1970)
 Veterinary Subject Headings.
 Commonwealth Agricultural Bureaux. 1971
 (70+44p)
 Veterinary Multilingual Thesaurus.
 Commission of the European Community. 1979
 Controlled Vocabulary 1981.
 Commonwealth Bureau of Animal Health.
 (122p)
 Animal Disease Thesaurus. 14th rev.

Veterinary Services, Animal and Plant Health
 Inspection Service, U. S. Department of Agriculture. 1988 (122+113p)
 国際獣疫事務局 (OIE) の最近の動きについてはつまびらかにしないが、上記 EC や CAB のものを参考にしていないのではないと思われる。

食糧農業機関 (FAO) の AGRIS 関係で作成している AGROVOC Thesaurus, 米国国立医学図書館 (NLM) の MEDNARS が使っている MeSH (Medical subject headings) や世界保健機関 (WHO) の「国際疾病分類規則」などについては、他に譲ることとする。

表記の問題など

英語でも英式と米式で綴りが異なるものがあり、文献検索に当たって注意を要するが、日本語のように片仮名・平仮名・漢字・ローマ字が融通無碍に使われるというようなことはない。

日本獣医学雑誌 (51巻1号) 1冊のなかには、日本獣醫學雑誌・日本獣醫學雑誌の3種類の表記が共存している。妙なことに、「雜」は使われていない。

文部省の学術用語集では、JIS 第2水準にさえない「汙」が「濾」のかわりに使われている。「心」と「皿」の区別を無視した間違いが大手をふってまかり通っているのは感心できない。

微生物学用語集では、易熱性 (エキネツセイ) がイネツセイとなっているが、耐熱性の反対語, ther-

molabile に対応する語としては、誠におかしいと感じるのは私が既に古すぎるからなのかもしれない。コトバは変化するものであり、消耗 (ショウコウ) がショウモウになってしまったのを引き戻すことはもはや不可能であろう。

このような例を挙げるときりがないのでこの程度にとどめるが、今後の作業でも表記や読みの検討に結構な時間がとられるであろうことは疑いない。

当面の問題

少なくとも「語」で表わされる情報の定着・蓄積・組織・利用に際し、「用語」が問題にされるのは当然のことである。特に情報量の増加に伴い、この問題は重要性を増してくる。

日本獣医学会や日本獣医師会でも、これまでに用語問題に若干の関心を示したことはあるが、本格的な活動には至っていない。おそまきながら、この研究会が昨年来この分野で動きをみせ始めたことは時代の流れであろう。

当面、獣医学用語を検討する組織的な場を設け、それを永続させていく方法を考えることが必要であり、これは獣医学関係者の責任でもあろう。

コトバが時とともに変化し、新しい知見が追加されていく以上、分野間格差と同様、時間、空間的な格差にも絶えず目を向けていかなければならない。

情報の生産者・発信者としての個人の責任とともに、この面で日本がどのような役割を果たしていくのかも、これからの重要な課題であろう。

獣医学の範囲の定義をせずに話を進めてきたが、獣医学が医学と農学の境界領域であることに異論はないであろう。その宿命が、私たちにとって有利か不利かはおくとして、獣医学が関心をもたなければならない領域は必然的に広い範囲にわたることとなり、獣医学用語の標準化をはかるためには、相当の精力を注ぎ込む必要がある。

獣医学主流から一見かけ離れた分野の仕事に長年かかわってきた者として、この面での今後の展開に期待するとともに、できるだけのお手伝いはさせていただきたいと考えている次第である。